

駿建

2015 Oct. vol.43 No.3

日本大学理工学部建築学科 日本大学短期大学部建築・生活デザイン学科

# SHUNKEN

*Quarterly Journal of*

*Department of Architecture, College of Science and Technology, Nihon University  
& Department of Architecture and Living Design, Nihon University Junior College*

Special Feature

## 日本建築学会賞各賞2015

受賞者 卒業生・非常勤講師インタビュー





# 日本建築学会賞 各賞2015

受賞者卒業生・非常勤講師インタビュー





日本建築学会賞は、日本国内の建築の世界で、最も権威があるとされている賞のひとつで、これまでも多くの卒業生たちが受賞している（※）。今年も2015年4月に、各賞が発表された。

建築作品の中で、もっとも優れた作品に与えられる日本建築学会賞（作品）には、構造家・小西泰孝（1997年院卒）さんが関わった「上州富岡駅」（設計：武井誠・鍋島千恵／TNA）と、非常勤講師の福島加津也先生らの設計による「木の構築工学院大学弓道場・ボクシング場」が受賞。また、非常勤講師の今村水紀先生らによる「駒沢公園の家」が日本建築学会作品選集新人賞を受賞した。

今回の特集では、佐藤慎也先生、古澤大輔先生、編集部のmosaki（田中元子＋大西正紀）が、受賞作品や各事務所を訪ね、受賞者のみなさんに話をうかがった。その作品を見ているだけではわからない、設計の裏で考えていることをのぞき込んでみたいと思う。

※日本建築学会賞（作品）は、国内の建築家に与えられる最高峰の賞。これまでに卒業生の高宮真介、山本理頭、白江龍三、水谷碩之、山本長水、渡辺明、金田勝徳、椎名英三、梅沢良三、また常勤もしくは非常勤として教鞭を執る（過去に執った）小泉雅生、飯田善彦、西沢立衛、横河健、坂茂、内村綾乃、山梨知彦、羽鳥達也（受賞順）なども受賞している。



Special Feature

## 日本建築学会賞 各賞2015

受賞者卒業生・非常勤講師インタビュー

### interview 1

インタビュー：福島加津也＋富永祥子／福島加津也＋富永祥子建築設計事務所、多田脩二／多田脩二構造設計事務所  
インタビューアール：佐藤慎也、古澤大輔

まず、佐藤慎也先生、古澤先生が訪れたのは、東京郊外に位置する工学院大学八王子キャンパス。

そこに建つ

「木の構築 工学院大学弓道場・ボクシング場」が、2015年度日本建築学会賞（作品）のひとつだ。

扉を開けると、迎えてくれたのは、設計者の福島加津也先生、富永祥子さんと構造家の多田脩二さん。

弓道場とボクシング場が、どうして木造の架構でつくられたのか!?



つくることと使うことを等価にすることで、  
利用者と建築との新しい関係を築く。



「工学院大学弓道場」内観。(写真：小川重雄)

福島加津也（ふくしま・かつや）：1968年神奈川県生まれ。1990年武蔵工業大学建築学科卒業。1993年東京芸術大学大学院美術研究科建築学専攻修士課程修了。1994～02年伊東豊雄建築設計事務所勤務。2003年福島加津也＋富永祥子建築設計事務所設立。2014年-日本大学理工学部建築学科非常勤講師。現在、東京都市大学工学部建築学科講師。

富永祥子（とみなが・ひろこ）：1967年福岡県生まれ。1990年東京芸術大学美術学部建築科卒業。1992年東京芸術大学大学院美術研究科修了。1992-02年香山壽夫建築研究所。2003年福島加津也＋富永祥子建築設計事務所設立。2006-12年日本大学大学院理工学研究科建築学専攻・理工学部建築学科非常勤講師。現在、工学院大学建築学部建築デザイン学科准教授。

多田脩二（ただ・しゅうじ）：1969年愛媛県生まれ。1995年日本大学大学院理工学研究科建築学専攻博士前期課程修了。1995-2004年佐々木睦朗構造計画研究所勤務。2004年多田脩二構造設計事務所設立。現在、千葉工業大学創造工学部建築学科准教授。

2015年日本建築学会賞（作品）

作品名：木の構築 工学院大学弓道場・ボクシング場  
設計：福島加津也＋富永祥子建築設計事務所  
構造：多田脩二構造設計事務所  
竣工年：2013年

**古澤**：学会賞受賞おめでとうございます。まずは、プロジェクトの経緯についてお聞きしてもよろしいですか。

**富永**：工学院大学は2012年の創立125周年を記念してさまざまな記念事業が行われました。例えば、建築家の千葉学さんが設計コンペによって設計者に選ばれた総合教育棟の建設事業を、皆さんご存知かと思います。今回のプロジェクトもその記念事業の一環として企画されたもので、専任教員である私たちが設計者として指名されました。

**古澤**：弓道場とボクシング場という機能が当初から求められたわけですか。

**富永**：弓道部の歴史はそれなりに長いのですが、練習場が屋外にしかなくて、練習環境が整っていませんでした。以前より嘆願書が出ていたこともあり、今回を機会に新しい練習場を整備しようということになりました。

**福島**：この八王子キャンパスは、広いけど平らな場所がとても少ないので、建設できる場所を探すことからはじまりました。実は今回新しく建てた弓道場の場所には、もともとボクシング部の練習場がありました。けれども、

他に適当な場所がなかったため、ボクシング場は一旦壊して別の場所に移設することになりました。そのため、結果として、弓道場だけではなくボクシング場もつくることになったのです。

**古澤**：なるほど。もともとは弓道部の練習場を整備することが目的だったのですね。

ところで、大学の施設で木造が採用されることは珍しいと思いますが、構造形式が木造になったのはどのような理由からでしょうか。

**福島**：これは大学側からの要望でした。自然災害を抑制するだけでなく、建築素材など社会資産としての森林資源、つまり国産材の積極的利用という社会貢献的な意味合いもありました。当然ながらコスト的にも有利になるというメリットもありました。大学側から良い材木屋さんを紹介していただき、最初の打ち合わせから材木屋さんと協働で設計を進めていきました。

**古澤**：通常だと要望を満たすプランをまず最初に決めてから、そのプランを実現するための構造形式が決まり、そのあと材木屋が決まるというプロセスですが、それが全く逆なのが面白いですね。

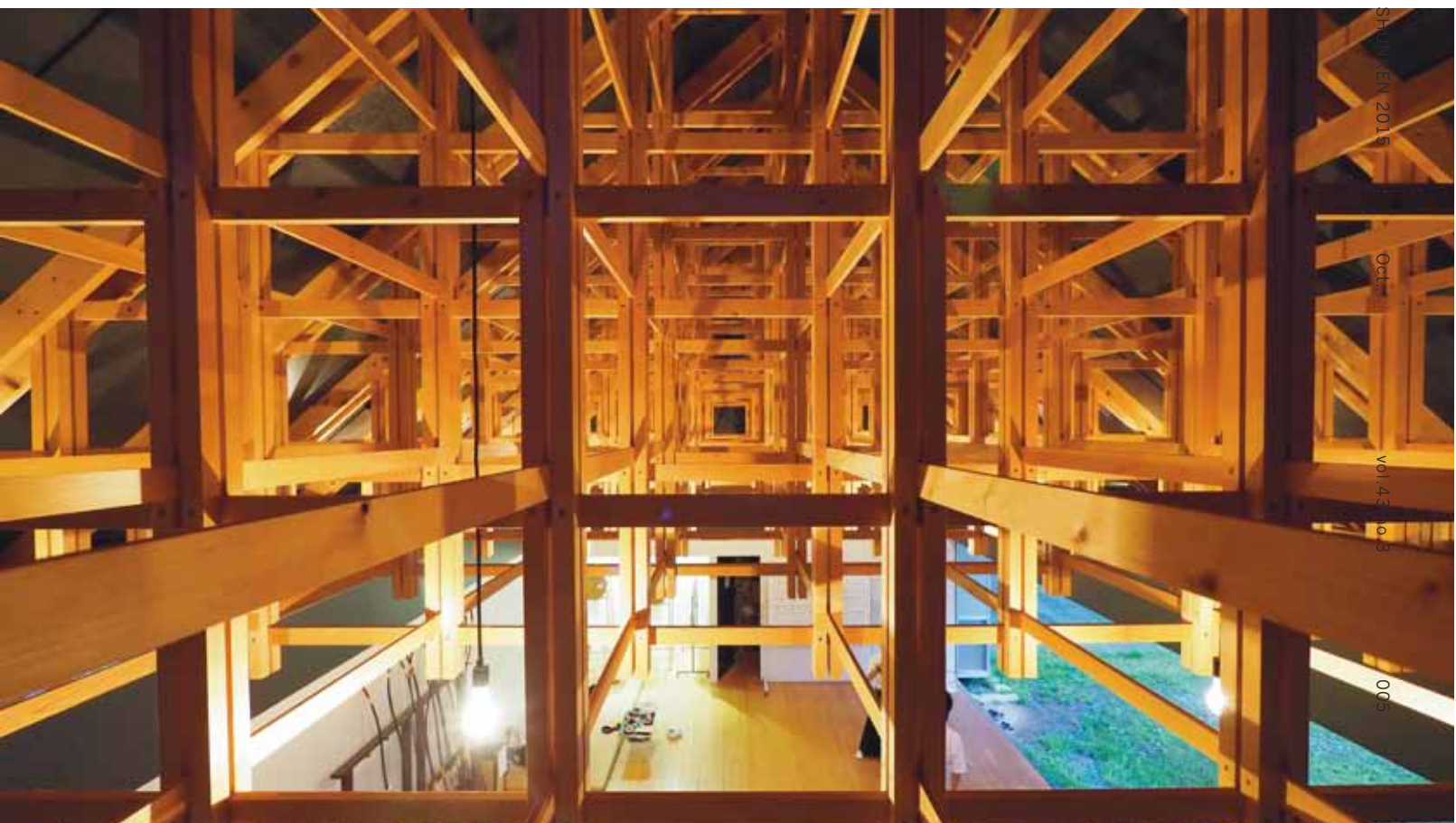
**福島**：材木屋さんから色々なアドバイスをいただいて、打ち合わせの中でヒノキのあかね材という木材を積極的に使うという方針が決まりました。

あかね材は、アカネトラカミキリという害虫の食痕が付いてしまった木材です。きちんとした性能保証がされているにも関わらず、印象が悪いため在庫が捌けないなどの問題がありました。やはり、ハウスメーカーなどはユーザーからのクレームを恐れて使いたがらないのでしょうか。あかね材を使うことは、そういった流通の問題も引き受けることになります。通常の材より安く手に入るというコスト的な利点もありますから。

一方で、この材を使うと、正方形断面の柱用部材に限定されてしまうという側面があったのですが、しかしその規制があったからこそ、逆に小さな部材で空間を構成していこうというコンセプトが、よりピュアになっていったと思います。

**古澤**：虫害材という利用されにくい材を採用することで、柱部材、つまり小径材を使っていかに空間を構成していくのか、そのスタディにつながっていったわけですね。

「工学院大学弓道場」内観。





## 静の空間と動の空間

**古澤：弓道場とボクシング場はともに木造ですが、だいぶ空間の印象が異なりますね。**

福島：大学からの要望を整理していくと、弓道場、ボクシング場の大きさが、偶然にも7.2メートル×10.8メートルの同一平面形になったのですが、ともに練習の邪魔にならないよう無柱空間とすることが求められました。

そこで、7.2メートルのスパンを木造でどのように飛ばすのかを検討していきました。極論ですが、単なる練習場という機能を満たすだけであれば、フラットな天井でも良かったのかもしれませんが。けれども、木造でやって欲しいという要望がある以上、まずは木造建築であることを表現する必要があると思いました。

さらに、弓道とボクシングは練習風景が全く異なります。そのため、それぞれの競技に相応しい建築的な表現をどのように構築するかを強く意識して考えていきました。

**古澤：木造であることを表現するというのは、木造らしさを表現するということですね。木でつくられていることを利用者が実感できることが重要だということでしょうか。**

福島：そうですね。日本の木造建築が持つ

いる歴史性に接続させることで、利用者が共感できる建築となるよう心がけました。弓道場では日本の民家に見られる貫(ぬき)と束(つか)、ボクシング場では寺院建築の斗栱(ときょう)をモチーフにして、それぞれを抽象化して表現しています。

**佐藤：このふたつの建築を特徴付けている天井のデザインが、建築計画的にどのように室内活動に貢献するのかに興味があります。弓道場やボクシング場という機能と天井とは、どのような関係にあるのでしょうか。**

福島：木造らしさと同様に、弓道らしさ、ボクシングらしさについても強く意識しました。とはいえ、弓道やボクシングの空間固有のイメージが確立しているわけではありません。

だからこそ、両者のイメージを抽象的に捉える必要がありました。弓道はとても形式的な武道である一方で、ボクシングはとても身体的な格闘技です。前者に相応しい空間が形式的な「静」の空間とすれば、後者は身体的な躍動感のある「動」の空間と言えるかもしれません。

**古澤：考えてみれば、相撲も非常に形式的な競技だだと思います。土俵の上に神明造の屋根が架かっています。つまり、形式的な競技と建築的な形式とが呼応している関係にある。**

以前、学生たちを弓道場とボクシング場に案内していただいたときに、彼らはボクシング場では賑やかだったのに、弓道場では物凄く静かに見学していたのを思い出しました。

福島：まさにそれが空間の力なんだと思います。建築家は、既存の形式を建築空間に新鮮な形として示すことに自覚的であるべきだと思います。

**古澤：実際、この弓道場の空間でボクシングの試合をやっても全く勝てなさそうだし、ボクシング場で弓矢を引いても全く当たらないですね(笑)。そう考えるとふたつの空間は、それぞれの使われ方と密接な関係を取り結んでいるのがわかります。**

## 日本的なものと西洋的なものを融合させる

**佐藤：日本的な空間に見える表現については、どの程度、意識をされましたか。**

多田：ここでは、日本の伝統的な建築をモチーフにはするけれど、そのままつくるのではなく、今日的な技術を取り入れるようにしました。

たとえば、民家などの日本の建築は、大きな横架材の上に束などの小さな部材を載せて屋根を構成しています。つまり、大梁の部分で曲げモーメントを受けているわけです。

一方で、今回の弓道場では、トラスという言葉わば西洋的な考え方を取り入れて、全ての部材断面を細くしています。モーメントではなく軸力で抵抗するから、空間に対して適正なプローションを実現できる。日本的なものと西洋的なものとが融合した形と言って良いのかもしれませんが。

**佐藤：伝統的な木造建築の延長にあるのではなく、一旦西洋的な技術を通すことで、部材同士の関係性が新しくなるのが面白いですね。**

富永：構造を検討する際に、多田さんが「木造は量があるのが良い」とおっしゃっていたのが印象的でした。この建築は部材の量や接合部の数が多いので、もし一部が構造的に駄目になってしまっても、他の部分で応力を受け持つことができる。つまり、量でカバーし

「工学院大学ボクシング場」内観。



て冗長性を保つ構造なんだと理解しました。

福島：木材の接合部に発生する摩擦力などが冗長性を担保しているのですが、そういった構造計算ができない部分を多田さんが実験を繰り返して、構造的な評価を与えてくれたことが、今回のプロジェクトで大変重要なことだったと思います。

古澤：数と量という概念はとても面白いですね。弓道場では無数の小さな部材断面が目飛び込んでくるし、ボクシング場では木材の圧倒的な質量を感じます。

福島：これらの概念は、2004年に竣工した「中国木材名古屋事業所」のプロジェクトのときから続いている一連の思考です。パラメーターのどれかひとつのタグをはずしてあげると、デザインが驚くほど新鮮なものに変わるといふ試みなのです。

富永：そう、この弓道場とボクシング場には、海外からの見学者が大勢いらっしゃいます。どうやら外国の方に受けが良いようです。

佐藤：国境を越えてシンパシーを感じる事ができるのは、西洋的な概念を経由した日本的な木造建築だからなのかもしれませんね。

福島：今回のプロジェクトでは、木造建築の原点をつくらうと思ったわけですが、そういった意味では少しは実現できたのかなと思います。

#### 使うこととつくるのが等価な状態

古澤：木材の接合部をよく見ると、ボルトなどの金物が目立っていますが、これはあえてそう見せているのでしょうか。

富永：そうですね。たとえば、弓道場ではエントランス側に接合部の釘頭を持ってこることで、ここを訪れた人に対してあえて釘で留めていることがより見えるように工夫しています。

福島：誰もが組み立て可能な工法とすることで、ここを使う人たちが、この建築がどのようにつくられているのかを想像できるように



「工学院大学ボクシング場」にてインタビュー風景。

したかったのです。

古澤：それはどうしてなのでしょう。

福島：建築の成り立ちを理解できるようにすることで、使う人が建築をつくることにも参加できるのではないかと思ったからです。私にはとにかくつくるのが好きなので、使うこととつくるのが等価であるのが理想的な状態なのです。あえてたとえるなら、上棟式のときのような、ずっとつくり続けている雰囲気が好きです。そうすることで、いつかこの建築に何か不具合が出たときに、利用者があそこの部分がおかしいぞ、と気が付けるようなオープンな関係が築けるのではないかと考えています。

古澤：特殊な技能を持った人しか関われない強い技術ではなく、誰もが取り扱うことができる弱い技術で構築することで、建築にサステナビリティを担保させるわけですね。木造であることを表現すると同時に、つくり方自体を表現しているということが良く分かりました。

最後に、学生たちへメッセージをお願いします。

富永：あまり建築の話とは関係ないかもしれませんが、学生時代は「私はこれが好き！」という誰にも譲れない自分だけのものを持つことが大事になって思います。建築というのは、とても幅の広い学問ですので、全ての分野を網羅的に習得することは到底できません。

だからこそ、自分にとって拠り所となるものから建築の世界に切り込んでいって欲しいと思います。

多田：私の意見も結構近いですね。大学での学生生活はおよそ4～6年間と長い期間ありますから、その期間を使って、何かを徹底的にやってみるのが良いと思います。対象は何でも良いのですが、とにかく徹底的にやる。集中してのめり込む経験をする事自体が、とても大事だと思うからです。

福島：唐突に聞こえるかもしれませんが、いつか自分が死ぬということを一度考えてみると良いかも知れません。どういう人生を送れば最期に笑って死ぬるかを、学生時代から想像することが必要んじゃないかと最近思っています。自分が今していることは、笑って死ぬために本当に必要なことなのか、それを意識すれば、日々の行動がきっと変わるはずですよ。

古澤：なるほど。そのような意識を持てば、学生時代に本気になれる何かは、すぐにでも見つかるのかもしれないね。今日は建築のデザインから人生のデザインまで、色々とおもしろなお話をいただくことができました。長時間お付き合いいただきありがとうございます。 ■

「木の構築 工学院大学弓道場・ボクシング場」を、建築の専門誌や雑誌でも見てみよう!

・『新建築』(2013年7月号)  
・『ディテール 198』(2013年秋季号)



Special Feature

## 日本建築学会賞 各賞2015

受賞者卒業生・非常勤講師インタビュー

# interview 2

インタビュー：今村 水紀+篠原 勲 / miCo.

インタビュアー：佐藤慎也、古澤大輔

写真：大西正紀

今村水紀先生が、建築家・妹島和世さんの事務所を独立したのが7年前。

現在は、パートナーの篠原勲さんと一緒に、建築設計事務所「miCo.」を主宰している。

そして今回、独立後デビュー作となった「駒沢公園の家」が、日本建築学会作品選集新人賞を受賞した。

この住宅は、今村先生、篠原さん夫婦の自邸だ。自分たちが設計した家に、自らが暮らすことで次々と見つかる無数の発見と、その先に見る建築とは!?



リノベーションを新築に活かす。  
そこに建築の新しい可能性があるはず。



「駒沢公園の家」外観。小さな3つの棟でつくられたひとつの家。右側の2つの棟は既存、左側の棟は増築となっている。(写真：鳥村銅一)

今村水紀（いまむら・みずき）：1975年神奈川県生まれ。1999年明治大学工学部建築学科卒業。2001-2008年妹島和世建築設計事務所勤務。2008年miCo.設立。2015年-日本大学工学部建築学科非常勤講師。

篠原 勲（しのはら・いさお）：1977年愛知県瀬戸市生まれ。2003年慶應義塾大学大学院大学院政策・メディア研究科修士課程修了。2003-2013年SANAA事務所勤務。2008年miCo.設立。

2015年日本建築学会作品選集新人賞  
作品名：駒沢公園の家  
設計：今村 水紀+篠原 勲 / miCo.  
竣工年：2011年



古澤：この度は「2015年日本建築学会作品選集新人賞」受賞おめでとうございます。受賞してどんな思いですか。

今村：ありがとうございます。素直にうれしいです。特に、現地審査を経ての受賞ということが、うれしかったですね。誌面やプレゼンテーションボードのみの審査というときもあるのですが、それだと審査員の方々も写真とテキストだけをよりどころに建築を読み取っていくので、誤解が生じることもあります。たとえば、この家の棟と棟の間の床の凹みも、コンセプトを優先させた無理のあるデザインと言われてしまったり……。けれども、今日のように実際に来ていただくと、なぜ凹んでいるのかという質問が出ないくらいに自然な形状だと思っています。

古澤：この住宅は、すべての部分が繊細な寸法でつくられているからこそ、実際に体験しないとわからないですよ。

今村：「1軒家を切った」と聞くと、それだけが強い印象を与えてしまうのですが、実際は、減築だけでなく、増築もしています。また、構造を切り離したときよりも、外壁の仕上げを部分的にはがした解体のときの方が、体感としては大きな変化だと思いました。暗かった室内に光が満ちてくる過程は興奮しました。

佐藤：賞をもらったとき、どのような評価が印象的でしたか。

1階。右が広間で、左が室内庭。



今村：どちらかというと、切ったことについて言及される経験が多かったので、つないだことについての評価をいただいたことが印象に残っています。建築家の藤村龍至さんから、「2層吹抜けの短いガラスの通路で全体をつなぐというのは、発明だと思います」と、お言葉をいただいたことは、本当に嬉しかったですね。

今日もそうですが、建築家の方々に、我が家を見ていただける機会は本当にありがたいと思います。思いもよらなかった感想や批評をいただけるからです。自分たちで設計をしていて何ですが、全てを言語化できているわけではないですし、無意識の事柄も多分にあります。ですから、建築家の方々との対話によって、さまざまな気づきが生まれるような気がしています。

古澤：講評側の反応を見て、また発見があるというわけですね。この建築は自邸として計画されましたが、ここに至るまでにどのような経緯があったのですか。

今村：出産と独立を前提に家を探しはじめました。仕事場と家は近い方が望ましいということから、事務所は都心に構えようということから、エリアは絞らずに東京のすごく広いエリアで探しました。最初は賃貸も視野にいていたのですが、子どもが生まれることや、母との同居を考えると、それなりの広さが必要で、賃料も高くなってしまふ。こんなに払うのだったら、マンションを買うことも視野にいてみようと思いました。友人から、すごく粘り強いという不動産屋さんを紹介いただいて、相談することにしました。ローンの組み方を教わり、だいたいの予算が出てみると、一応、戸建も買えますよという感じで、家探しがスタートしました。

戸建を中心に何件か物件を見ましたが、予算が予算でしたので、基本的には狭小敷地に半地下の3階建てという物件ばかりでした。その中で、この家だけがすごく小さいけれども庭がついていました。旗竿状敷地というのは不動産価値としてはマイナス要素ですが、私たちにとっては、竿の部分も何かできそうな余地に見えました。

古澤：この家の一番の決め手は何だったのでしょうか。



玄関を入ったところから、広間と室内庭を見る。

今村：ふたりとも、ほぼ直感の即決でした(笑)。強いて言うなら、この家だけカランとして見たことでしょうか。後から土地を調べて分かったのですが、容積率を使い切っていないので、そう見えたのだと思います。また、外観が好きだったというのも大きかったと思います。改修事もローコストでやらなければいけないため、最悪、外装は手をいれなくてもあるだろうと考えていました。

古澤：購入してからリノベーションの設計はすぐにはじめたのですか。どれくらいの期間がかかりましたか。

今村：設計だけで、2年でしょうか。本当に時間がかかりました。子どもが生まれる前に賃貸に引越そうとしていたのに、実際は子どもが生まれてから土地を購入しました。購入し空き家のまま、私は子育てをしながら、篠原はSANAAに勤めながら、自分たちで少しずつ設計をはじめました。

当初、母が水廻りとリビング、自分の寝室を1階に欲しいと希望したので、1階の増築が前提になりました。ただ、普通に増築すると、周辺に対して大きくなりすぎてしまうと感じました。なので、半屋外的な透明感のあるボリュームを足してみたり、なるべく低めのボリュームにしてみたり、色々な工夫を試みながら案をいくつもつくりました。確信を得られる案というものはなかったのですが、ぐずぐずしていると子どもがどんどん大きくなっ



ていくので、とにかくハイハイをはじめの前には竣工させようということで案を決め、実施図にまとめました。

見積を工務店に出して3日後くらいの朝、篠原が実施平面図に2本の線をひいた紙を発見しました。それを見たときに、「そうか！切り離せばいいんだ！」って。周辺に対して圧迫感が拭き切れていなかったことに対して、解決できる気がしました。そこで、見積を止めて、また、基本設計からやり直すことにしました。

### 減築と増築のせめぎ合い

**佐藤：**まちに対するスケールを気にする感覚は、建築家の誰しもが持っているものではないと思います。まして戸建のリノベーションで、基本はインテリアを触ることがほとんどなので、発想が内向きになりがちだと思うのですが、どうして今村先生たちは外に対しても意識が向いていたのでしょうか。

**今村：**なぜでしょうか。自然とそうように考えていました。隣の敷地が畑という形で空いていて、そちら側から見ていたために自然と立面を気にしていたことが影響しているのかもしれない。

**篠原：**少し大きな視点で周囲を見ると、この街はいくつかのエリアでできていることが分かります。このエリアと隣り合うエリアは、区画がゆったりとしていて、大きな家が建っ

ています。外構はもちろん、境界もきちんとつくられている。一方で、この家の建つエリアはぎゅうぎゅうに家が詰まっています。けれども、なんとなく、街の雰囲気はつながっていて、すごく小さな庭も、その雰囲気をつくる大事な要素だと感じました。

何十年もかけて、安定を形成してきた土地に、僕らがやみくもに新しくひとつ足すことは、街のバランスからしてあまり良くないなと思いました。そういう思いが、外に対して意識を向けさせたのだと思います。そして、最終的に小さな3つの棟でひとつの家をつくることに行き着きました。

**古澤：**建築雑誌のテキストに「まわりより小さなボリュームで、大きな空間をつくる」とありました。まさにそのことですね。

この建物は、増築をしながら減築をし、減築をしながら増築をしている。それがせめぎ合っているから、どこが増築で、どこが減築かは、一見わからない。減築しているのに元より大きくなりながらも、周囲とも馴染もうとしている。これって増築、減築の新しい取り入れ方なのかなと思いました。どちらも通常は技術的なものとして扱われそうなものですが、こんな形で融合ができるのですね。

**今村：**減築しながら、増築するなんて不純ではないか、と評価されたこともありました。どちらかというと、減築の手法を評価し、増築を否定するようなニュアンスのお話だったと記憶しています。



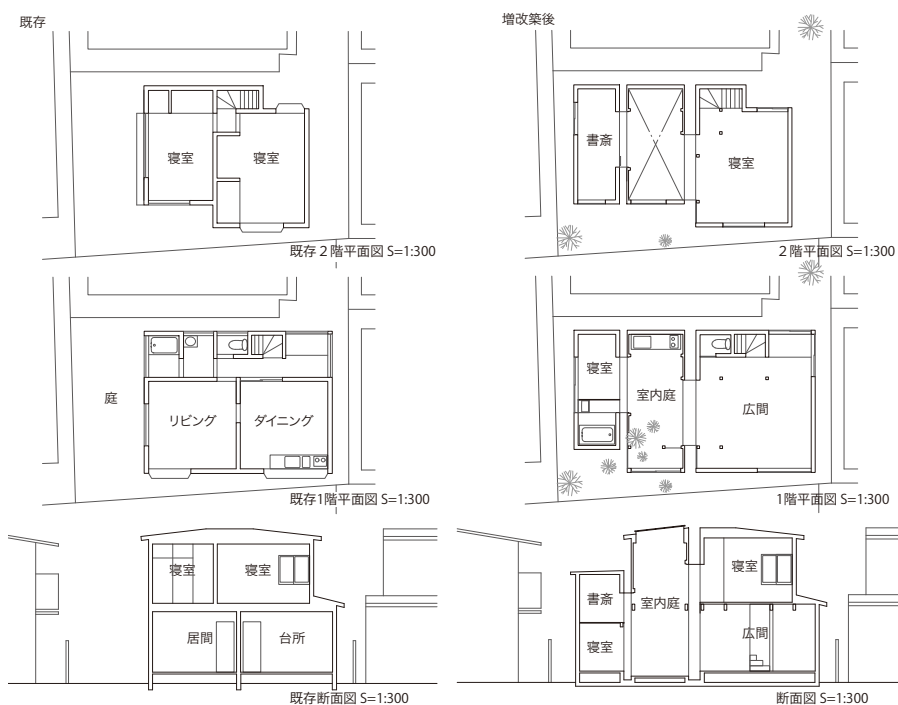
旗竿敷地に立つ。アプローチは緑豊かで、可愛く立つ既存建物が見える。

**古澤：**減築なら減築として表現し、増築なら増築として表現しろと。それは、新築至上主義、従来の考え方ならそう言うでしょうね。

**今村：**今でこそ、リノベーションは建築の世界でも浸透していきましたが、当時はリノベーションの作品自体の発表がとても少ない状況でした。自分たちの処女作がリノベーションというのは不利で、雑誌での発表はできないかもしれない、なんて変な心配もしていました。

今は、リノベーションに挑戦したのは、良い経験だったと思っています。新築では気づけなかったことが、リノベーションではたくさんあるからです。たとえば、エントランスの庭越しに家を見ると、北側部分の2階の外壁がセットバックして段差がついていたり、東側も1階と2階で不思議な段差がついている。新築だと、わざわざ構造を架けかえるような、このような形ってあまりつくらないと思うのです。でも、多分、このような段差が2階レベルでの空所を周辺につくって、お隣同士とのお互いの関係を調整している。光と風の廻り方が良くなっているように感じます。ひとつの家で考える合理性と、お隣も含めた建築群で考える合理性って、少し違うということに改めて気付かされました。

また、今までの新築の設計では、庇をそんなに多用しなかったのですが、ここには最初から庇があって、暮らしているうちに、庇っていいなって思うようになりました。そういう学びもたくさんあります。







2階寝室から室内庭を見下ろす。



1階広間から室内庭越しに、1階の寝室と2階の書斎を見る。



2階書斎から室内庭越しに、1階の広間と2階の寝室を見る。

古澤：この家の既存の庇は薄くてカッコいい。そして、それと同じような庇を増築のほうにつけています。これは従来の価値観からすると、増築が建築家のポリシーでつくられてないと判断される。けれども、リノベーションではそこにある既存の形に対してどうクリエイティブな発見をするかが求められます。もちろん既存のものすべてが良いわけではない。だからそこには、既存に対しての審美眼が必要です。

今村：リノベーションを1軒手がけてみて、リノベーションは新築に比べて、選択肢がたくさんあることに気づきました。その最たる選択肢が、減築なのではないかと思えます。新築は建てるしかないけれど、リノベーションは壊すという選択肢がある。基本的には、既存建物を肯定し、そこにあるものに向き合うしかないので、さまざまなことに気づかされます。自分たちの設計に対する考え方も変わってきていると思えます。

篠原：本当にそうだね。今までは、庇なんていらなと思っていただけだけれど、今では庇の詳細な寸法が空間や生活に大きく影響すると感じています。

### 俯瞰して大きな全体をなんとかする

佐藤：そういう視点からすると、独立まで勤めていた設計事務所はどのように見えますか。違う捉え方になりますか。

今村：独立して7年になりますし、自然と少しずつとらえ方は変わってきていると思えます。その時々で、一番良いと思えることを実践してきたと思えますが、今の自分だったら、違うデザインをしたかもしれないという部分はあります。

佐藤：スタッフレベルの判断が、妹島事務所のスタイルに無理やり合わせてしまうということもあったのでしょうか。

今村：それはいいですね。妹島事務所では、妹島さんも担当スタッフも、みんなが納得のいくデザインを見つければいいので、検討を重ねます。妹島事務所では、その努力をものすごくします。

妹島事務所時代も、今も、ベストを尽くし、納得するまでやるというところは変わりませんが、独立して違う環境に身を置くことで、今までとは違った価値観を知り、導き出すベストの答えが少し変わってきているのだと思えます。

佐藤：今後社会に出て行く学生たちにとって、建築とインテリアの線引きは気になるところだと思います。そのことは、どのように捉えていますか。

今村：私自身が設計をするときには、建築とインテリアの間に、特に線引きはしていません。同じように、環境をとらえ、同じように検討をしていきます。ただ、扱うスケールが

ほんの少し変わる感じはします。住宅でも1/100で見えてくるものと、1/50で見えてくるものは変わってきます。いずれにせよ、全体を俯瞰するような視点と、体感を想像する視点と、両方の視点を持って設計することが、建築もインテリアも大切だと思っています。

古澤：最後に、リノベーションでデビューされて、またこれからどんどん新築にもトライしていかれると思うのですが、そこではどのようなことをお考えですか。

今村：駒沢公園の家は人生で初めてリノベーションに挑戦した作品です。今思えば、新築の設計のやり方で検討していたと思えます。新築のやり方がそのままでは通用しないこともありました。壁にぶつかってはじめて、いつものやり方じゃダメなんだと、一つひとつクリアしていったように思います。次のリノベーションでは、既存建物を材料の宝庫のように見るような余裕が出てきたように思えます。既存建物で発見した形状の特性など、まだ建築の作法として定着していないように感じますが、きちんと言語化して説明できるようになりたい。それができれば、リノベーションで得たことを、新築の可能性につなげていくことができると考えています。

「駒沢公園の家」を建築の専門誌や雑誌でも見てみよう!

- ・『新建築』（2011年8月号）
- ・『Casa BRUTUS』（2012年2月号）



Special Feature

## 日本建築学会賞 各賞2015

受賞者卒業生・非常勤講師インタビュー

### interview 3

インタビュー：小西泰孝／小西泰孝建築構造設計

インタビュー：佐藤慎也、古澤大輔、田中元子

写真：大西正紀

大学院卒業後、  
佐々木睦朗構造計画研究所に勤め、  
「梅林の家」や「金沢21世紀美術館」など、  
数々の名現代建築を担当した小西泰孝さん。

5年後に独立し、以後、  
社会により良い建築を生み出すべく、  
構造的な立場から、建築家たちと共に戦う。

けれども構造家の戦い方は、  
一筋縄ではいかなさそうだ。  
小西さんならではの戦い方と、  
その裏にある想いをうかがった。



いかに構造の合理性を崩せるか。  
いつもそのことを考えています。



「上州富岡駅」外観（写真提供：TNA）

小西泰孝（こにし・やすたか）：1970年千葉県生まれ。  
1995年東北工業大学工学部建築学科卒業。1997年日本  
大学院理工学研究科建築学専攻博士前期課程修了。1997  
年佐々木睦朗構造計画研究所入社。2002年小西泰孝建築構  
造設計設立。

2015年日本建築学会賞（作品）

作品名：上州富岡駅

設計：武井 誠・鍋島千恵／TNA

構造：小西泰孝建築構造設計

竣工年：2014年

※鍋島千恵さんは、2014年度まで建築学科非常勤講師を勤めていた

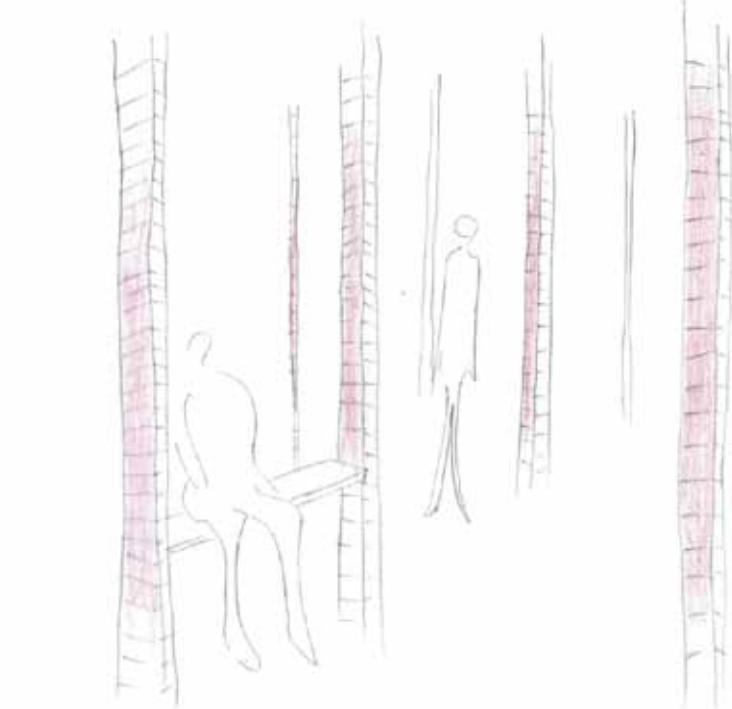
古澤：「上州富岡駅」（武井誠+鍋島千恵／TNA）は、実施コンペでしたよね。最初は設計者とどのようなやりとりがあったのですか。

小西：実施コンペのときは、決定してから加わるのではなく、コンペ参加時から建築家と一緒にやります。今回は最初の打ち合わせの前に、武井さん、鍋島さんたちとお互いに待ちきれない感じになって、何度かメールでやりとりをしました。最初にこんなイメージのスケッチ（右図）が送られてきたんです。

古澤：これは不思議なスケッチですね。建物全体というよりは、煉瓦と人との関係だけが描かれている。通常、構造は屋根、壁、柱があってということからはじまるけど、これは人間とマテリアルがあるだけです。

小西：そうか、そんなこと意識したことはなかったけど、確かに今改めて見るとそうですね。まずこの絵を見て、煉瓦の中に鉄を入れるとしたときに、煉瓦と鉄の関係が構造的にどうありうるかを3つ書いてお返しました。

1つ目は、（1）煉瓦が鉄の錆や耐火に対して、保護してくれるという関係性。2つ目が、（2）煉瓦が中の鉄の座屈をとめる効果があるということ。これは鉄筋コンクリートと同じことですね。そして、3つ目が、（3）煉瓦自身を構造として積極的に使うこと。垂直力だけではなく、水平力もすべて煉瓦に負担する。これらは（1）から（3）にいくほど、難易



「上州富岡駅」コンペの初期に送られてきたスケッチ（図版提供：TNA）

度が高まります。例えば、（3）は、実験を繰り返していかなくてはならないので、今回の工期や予算を考えると現実的ではない。

すると、武井さんからすぐに（2）が面白そうですねと返事がきたんです。最終的に（2）になったわけですが、メールだけでテンションがあがって行って、面白そうなものができそうだと、そのときすでに思っていました。

古澤：（2）を選んでから、今回のように細い鉄骨柱や、柱に溶接されたブレース（筋交い）を煉瓦で挟み込むことで強い耐震性を得る構造形式は、どのように導き出されたのですか。

小西：まず、大きな屋根を受けなくてはいけなかったんで、それをすっきりとした鉛直部材で支えるとなると、鉄骨造が最適でしょう。ところが次に、水平力にはどう抵抗するのとなるわけです。×型のブレースを普通に入れてもいいけれど、それでは全く使い道のないブレース面ができてしまう。それじゃ、ブレースを真上ではなく、途中で留めたらどうだろうかという話が出てきました。

古澤：設計者の説明にあった「繭」の意図って、細い柱にからまるブレースのことだったわけですね。

小西：柱にブレースが取り付いていく姿と「繭」のイメージが重なって、打ち合わせのときに武井さんが言っていましたね。「これ繭みたいだ！」って。

古澤：最初は部分からスタートして、その骨組みによって全体が与えられ、部分と全体を横断しながらスタディを繰り返していったわけですね。鉄骨の柱は水平力を受けてないピン接合ですか。

小西：屋根の鉄骨梁と柱は剛接合です。そのラーメン架構の柱にピン接合でブレースを取り付けて、煉瓦で覆っています。



「上州富岡駅」内観（写真提供：TNA）



## 構造の合理性を崩すことが仕事

古澤：建築は、**構造的合理性や意匠的合理性**といった、**バランスを考えるもの**だと思います。たとえば、**シンプルに柱に対して大きなブレースをつくり純ラーメン構造とする方が、合理性があるという見方もある**と思います。ただ、**小西さんはそうしなかった。その際の、線引きが、エンジニアの審美眼だ**と思うのですが。

小西：もちろん、柱が少し太くなったとしても、純ラーメン構造にした方が安く建てるができます。そのように構造的に合理的につくことは簡単です。材料を少なくすることが、最も合理的で施工も簡単になるなら、方法はいくらかでもあるわけです。

けれども、僕はどこまで構造の合理性を崩すことができるかな、ということをいつも考えている気がします。このプロジェクトなら構造の合理性をどこまで崩せるかを、毎回判断していく。

佐藤：**構造の合理性をうまく崩して、良い建築になった**というのは、**どこにポイントがあるのでしょうか。**

小西：そのさじ加減が毎回難しいところなんですけど、やはり一番重要なのは、その建築について、構造の視点できちんと語れることなんです。一番いけないのは「建築家がこうしたいと言ったので、こうしました」と言うことです。

それを具体的に何で勘定していくかという

と、ひとつは構造部材の数量です。たとえば、純ラーメン構造だと100の部材のできるものを、構造的合理性を崩したときに、120、140、160まで許容するのか数値を見ていく。200まで倍になったら、それはないよとか。もちろん崩していくほど、費用や工期がかさみますから、そこで大事なのは、それと引き替えに何かあるかということですよ。

「上州富岡駅」の場合は、ステー式のブレースを細かく入れていくことと引き替えに、そこに煉瓦のベンチができたり、人の「場」ができることがひとつ。さらに構造以外のメリットをいくつも見つけていきました。それは全部、自分で理解できるメリットでないといけません。それが自分で理解できていないと「それは建築家が言ったんで」となるわけです。

佐藤：**倍になったら、やばいよなっていうのは、それはどのような根拠によるものなのでしょうか。**

小西：ほぼ感覚的なところですよ。勤めていた佐々木睦朗の構造事務所でも、自然とそのような感覚を持っていました。僕は佐々木事務所以外を経験していないので、他の構造事務所と比較できないのですが、ただ、そういう判断をするためには、自分自身が構造以外のことも理解できていないといけません。それができないと、あるメリットと引き替えに構造の合理性を崩すことはできないから。だから、大学を卒業してからの方が、構造以外の勉強に必然的に関心を持たざるを得なかったですね。

古澤：**構造的合理性を崩すとき、崩した先の判断は、審美眼とそれ以外にもありますか。**

小西：見たときのバランスが一番気にします。ただ、何か建物が完成したときに「構造がすごいですね！」と言われたら終わりだなと思っています。「すごい！」ってことは、使う人にとって、気になる存在になってしまっているということですよ。そんなに構造がすごい存在になる必要はないと思っていて。だから、合理性を崩しながらも構造が奇異に映らないように考えています。

古澤：**構造家にもさまざまなタイプがあると思いますが、条件を読み解き形を与えるのではなく、逆に形の合理性から提案することはありますか。**

小西：私の場合は、あまりないですね。基本は建築家が考えていることをベースとしていくので。もちろん構造の世界には、合理的な形というものはいっぱいあるんですが、あまりそこには持っていかない。ただ、予算がとんでも少ない場合なんかは、そういう提案をするときはあります。

## 構造家としての喜びはどこにある？

田中：**建築家はその人のカラーがよく見えますが、構造家にはあまり見えません。私の構造設計事務所は、こうなんですよ！とアピールしないのはなぜでしょうか。**

小西：僕自身、自分がやってきたことに、明確なポリシーがありますよ！といったマニフェスト的なことは、あまりないですね。構造家は建築家が考えていることに対する、コンサルティング的な立ち位置だと考えているからです。もちろん、結果的に「小西さんはこうですよ」と言われて気づかされることはありますけどね。

田中：**そもそも、小西さんはどうして構造の道を選んだのですか。**





小西：私の父親が金沢で構造設計事務所をやっていました。今も現役です。自宅の一角が事務所だから、仕事が終わっても茶の間で電卓叩きながら図面を描いていたり。日曜日なんかは家族でどこか遊びにいった帰りに、現場に立ち寄ることも多かったです。そんな日常でしたから、世の中で一番普通の仕事が構造設計だと思っていました（笑）。

田中：建築家の石上純也さんや佐藤光彦先生をはじめ、小西さんが関わられている建築家の方々は、建築家の中でも特に攻めの姿勢で設計をされている方ばかりですよ。だから、きっと小西さんもそういうタイプの方だと思っていたんです。けれども、今日お話をうかがってみたら、そうじゃなかった。実に受け上手で（笑）。

小西：建築家の皆さんは、攻めていますからね。だからこそ、逆にこっちは受けて立つ必要があるんでしょうね。むしろ一緒に仕事をする建築家が攻めないタイプだとしんどいかもしれないです。

いろんな建築家と打ち合わせをしますが、一番困る質問が「小西さん、今回何か（構造的に）面白いこと提案できないですかね？」って言われることなんです。何もないところに構造は現れないですからね。建築家のこういうことを考えていきたい！というイメージがあって、そこから構造を考えていくわけですから。

もちろん、何もなくても、たくさん持ち札を持っていて、面白いことを提案する構造家もいると思います。けれども、僕は建築家とスタートするときに、フリーなところからスタートしたい。材料も含めて、すべてフリーで考えはじめたいんです。

田中：小西さんが、今まで見たこともないような建築にも対応されていることは、もちろん建築家との相性もあると思うのですが、それ以上に、建築家が創り出す美しいものや綺麗なものが好きで、ワクワクされているのかなと思いました。

小西：面白いもの、綺麗なもの、カッコいいものは大好きです。そういうものを建築家と一緒に考えていくのが本当に楽しいんです。

田中：構造家は建築家に火に油を注ぐというか（笑）、まさに攻めてる建築家たちの背中を押しているわけですね。

建築学生の中には、設計課題が評価されなかったりすると、自分が取り残されてしまうと感じている人も少なくないそうです。けれども、構造家という職能が、そうではなく物事を受けとめ、その上でクリエイティブに建築家をサポートするように、建築に関わるさまざまな職業は、設計課題でトップになるような資質だけを求めているわけではないのです。いかに自分にフィットした道を選ぶかということが大事になりますね。

小西さんは、どうして日大理工を選ばれたのですか。

小西：僕は大学院から日大理工へ来たのですが、何といてもすごい先輩方がたくさんいたことが大きかったです。恩師の齋藤公男先生、渡辺邦夫さん、中田捷夫さん、梅沢良三さん、日大理工出身の構造家を挙げたらキリがありません。そういう人たちのいる環境へ自分の身を置くだけで、自分ごとになりますからね。そういう意味でも、日大理工は、構造って面白いんだって思える機会が多いと思います。

佐藤：大学における構造の教育で何か足りないものはあるでしょうか。

小西：モーメントの計算だけしていても、なかなか面白さを感じることができません。あれを面白いと思えというのは無理がある（笑）。

だから、実際の現象にリンクするような構造実験のような、身体で感じ取れる力学の授業があった方がいいと思いますね。

『東京の近代建築：建築構造入門』（監修：山口廣、著：江口敏彦/1990/理工学社）という昔から好きな本があります。この本は、さまざまな構造、構法、材料が紹介され、それらを実際の建築物に結びつけているもので、さらに取り上げているのが東京の近代建築なんです。日銀から東京駅、超高層ビルまで、身近なあの建築の構造がどうなっているかということを解説しています。近代建築史の授業で出てくるものが多いので、歴史の授業と合わせても楽しめます。近代建築にも構造があるんだって、役に立つんですよ。つまり、構造ってとても身近にあるものなんですよ。

佐藤：最後に、構造家として仕事をしてきて、自分の作品は、誰に評価されるのが一番うれしいですか。

小西：われわれ構造家は建築家から発注されるので、常に直接クライアントに会うわけではないんです。けれども、クライアントがどういう建築を思い描いているか、強く意識します。

建築が竣工して最大級にうれしいのは、やはりクライアントが喜んでいる姿ですね。そんな状況のときは、得てして建築家はもちろん、社会の人々も同時に気に入ってくれることが多い。建築家、クライアント、そして社会の人たちと喜びを分かち合える充実感は、何にも代えがたいものです。

「上州富岡駅」を  
建築の専門誌や雑誌でも見てみよう！

・『新建築』（2014年5月号）  
・『GA JAPAN 128』（2014年5、6月号）



## 短期大学の歴史をたどる特別展が開催！

text=山崎誠子 短大准教授

20 15年7月30日～2016年6月30日まで、船橋キャンパス5号館2階にあるCSTミュージアムで、「特別展、日大理工のちからⅧ『短期大学部（理工学部併設・船橋校舎）理工系短大の65年の実績とあゆみ』」を開催中です。

学芸員課程を取らない限り、建築学科も短期大学の学生も、CSTミュージアムって何？と思うでしょう。常設展では現在、日本大学理工学部の90年史と駿河台旧1号館の図面や部品、巨大計算機などを展示しており、無料で見学できます。中央展示室では、近年各学科にスポットを当て、特別展を行っています。ちなみに建築学科は8年前に展示を行いました。

そこで、今年創立65年になる短大が特別展の担当になり、私が企画と設営を任せられました。他大出身で日大理工・短大の歴史に疎い私がやるということはどういうことなのか、任せられたときは戸惑いましたが、シンプルに短大の歴史を追いかけることにして、過去65年間短大で行われてきた授業、研究の成果や道具、関わってきた方々の紹介に焦点をあて、展示することにしました。

短期大学部は3学科10専攻もあり、一度にすべてを展示することは難しいため、約3か月ごとに展示を変更していく予定です。現在は昭和16～40年ぐらいにつくられた電気工学実験室の実験道具と、各学科で利用していた昭和30年代からの計算機類にスポットをあてて展示しています。実際に触れて動かすことができるものも多いため、来館者には好評なようです。

建築学科関係では、昭和30～45年に制作されたパース、卒業設計も展示しています。ぜひ、学生、教員、OB、一般の方々まで、見学に来てください。

駿



扉を開けると、電気系の実験道具の展示、その奥は化学系の実験道具などの展示になっている。



入口から左手のエリアは、各研究室で使われていた1970年代のスチール製の棚や机を利用し、計算機や設計系の作品、土木測量機器を展示している。



1953年に製作された横河電機製作所製「商用周波数用の共振振動子形周波数計」は、実際に電源を入れて試せるようになっている。



木製作業机は、昭和40年代から現在まで電気実験室で利用されていたもので、木製のツールもその頃から化学実験室で利用されていたもの。



1960～1970年代に使われていた教科書を展示している。今後、随時入れ替えを予定。



1960年代の建築系学生の作品。この頃はインキングをする際に烏口（からすくち）を利用している。



8月1日、2日と船橋キャンパスで行われたオープンキャンパスでは、「計算尺使ってみよう！」ミュージアムとの連動企画を行った。



開催中のポスターには1970年代に使われていた教科書、タイガ一計算機、計算尺を掲載した。



## 竹の切り出しから家具製作までのプロセス体験 text=高安重一 短大助教

「も のづくりワークショップ」が松戸の竹林の整備体験を取り入れたスタイルになって2年目。今年のテーマは「ピクニックのしつらえ（中央庭園バージョン）」でした。

今年は100名の1年生のうち受講希望が49名となり、実践的な授業への期待が大きいに感じました。最終的には受け入れ可能人数から29名に絞られ、5班に分かれてワークショップのスタートです。

1日目は、ホワイトボードを使ったオープンなエスキス。他の班の様子もうかがえるため、活気あるものとなりました。ここで切り出す竹の長さや本数の見積りまでを行いました。

2日目は、NPO法人「松戸里やま応援団」の皆さんに、屋敷林の整備、竹の扱い方などを教わりながら、60本ほどの竹を伐採しました。

3、4日目は、14号館のピロティで日陰を求めながら製作。力技も小技も必要です。そして、5つの作品が完成しました。以下が、5作品の概要です。

A：座椅子とテーブル。テーブルは半割がところどころに組み込まれており、機能的にはお皿付きテーブルなのだが、鮮やかなグリーンと薄黄色のコントラストが特徴。

B：水平な一本の長い器と垂直の段々の皿。地面に接しないで、ぶら下げられるのがポイント。

C：既存ベンチに寄生するようにセットすると飲食可能になる道具。

D：2段階の高さを用意したピクニックセット。

E：竹を垂直方向に集合させたオブジェクトに見えるが、竹の切り口の大小、深浅に合わせて、冷やされた食事や飲み物を提供するスタンド。

参加者が増え、たくさんのアイデアを製作できたのは大きな収穫でした。各班とも納まりに苦勞するので、今後は模型をつかって確認するなどのプロセスを組み込むことで、実物の精度を高められると良いと思われました。



ホワイトボードを使ったアイデア出し。

猛暑だったが竹林は過ごしやすい。



「松戸里やま応援団」の皆さんとも交流。



A：半割の部分には食材が一列に並びます。 B：木からぶらさげることによって遊具のようにも見える。 B：流さないソーメンとしての設え。



C：ベンチにセットした状態。 C：ペットボトルやコップなどが固定され、 D：シンプルな2種類のテーブル。意外と機能的。



E：地面から生えたような見え方。

E：上から見れば、水と氷と賑やかな食材。



## FLOATING FLAT with a glass みんなが集えるパーティテーブルの制作

text=春日貴美子 設計事務

夏季集中授業「デザインワークショップ」を、8月1日から6日まで実施した。参加者は、3年生27名、4年生3名、合計30名。非常勤講師の伊藤暁、小川博央、福島加津也の先生がたを迎え、科目担当の田所辰之助先生を含めた4名が指導にあたった。

今年の課題テーマは「FLOATING FLAT with a glass-みんなが集えるパーティテーブルの制作-」。制作条件は、飲み物を入れたグラスを倒れないように置くことができる(with a glass)、ということのみ。素材や材料は自由とした。テーブルを単に机と考えるのではなく、浮いた床面(Floating Flat)ととらえると、そのデザインの可能性は家具から空間へと一気に広がっていくという、極めて建築的な要素も含んだ課題である。

初日に各自考えてきた案を発表し、その特徴をもとに先生1名と学生7~8名のチーム分けがされた。どのチームも試作品をつくって、材料やスケールを検討していたが、原寸大での制作は構造的な工夫も当然必要となり、エスキスでは連日熱い構造トークが繰り返されていた。

成果物がパーティテーブルということもあり、懇親会は5号館製図室に完成作品を設営し、実際に飲み物やお菓子を並べて、使い心地を体感。4作品をみんなでまわって、感想を言い合いながら楽しい時間を過ごした。

短期間のグループ課題を通じて、意見をまとめることの難しさ、作業分担による計画性、予算を考えた材料の選定など、今までにない経験ができた、という声が多く聞かれた。これら4作品は、NU建築週間には、1号館CSTギャラリーに展示を予定している。 **設**



Team: 紙組 (担当教員：伊藤暁)  
メンバー：市ノ川貴之、鄭芝銀、高橋洋瑛、前田峻甫、石出祐介、米田誉仙、島津行宏  
紙を折り曲げ、かみ合わせて制作。



Team: MOVE (担当教員：小川博央)  
メンバー：小澤祐太、平間裕大、望月美那、茂木将多、池田貴大、夏見優花、大木裕登、齋田大輔  
竹材と帆布で制作。テントのように組み立てが可能。



Team: ripple (指導教員：福島加津也)  
メンバー：櫻井達也、佐藤千香、澤明日菜、吉田隼也、山本結久、矢坂研二、福井志麻  
筒状にした巻きダンボールを集積させて制作。



Team: VICINAL -近傍- (指導教員：田所辰之助)  
メンバー：稲毛田洗太、大内有沙、大吉龍成、小田切寛史、韓維宣、三浦陸夫、中村聡志、高梨遥奈  
ワイヤーを張った橋のようなテーブルを制作。



最優秀賞に選ばれたrippleに賞状授与。

## 今年もさまざまなジャンルのゲストが登場！2015年度オウケンカフェ

理工建築にとどまらず、日大建築系すべての卒業生による会「**日本大学桜門建築会**」、略して「**桜建会**」。その桜建会が企画してゲストを招くレクチャーシリーズ「**オウケンカフェ**」が2013年7月から月に1度のペースで開催されている。卒業生はもちろんのこと、現役学生たち、また外部の誰もが参加可能だ。今回は、アーティストの北川貴好さんと東京R不動産/SPEAC inc.の吉里裕也さんのレクチャーの学生レポートを紹介する。

さまざまな世界の最前線で活躍する人の話から、学ぶことは多いはず。大学の授業だけでは伝えることのできない、さまざまな世界の話の聞いてみよう！

## 学生レポート

## 2015年度開催スケジュール

- 4月22日(水)【終了】稲垣淳哉(建築家/Eureka共同主宰)
- 5月25日(月)【終了】佐々木高之(建築家/アラキササキアーキテクト)
- 6月24日(水)【終了】北川貴好(アーティスト)
- 7月22日(水)【終了】吉里裕也(東京R不動産/SPEAC inc.)
- 9月30日(水)【終了】野田恒雄(建築家/横浜市都市整備局デザイン室)
- 10月28日(水)岡部友彦(コトラボ)
- 11月25日(水)浜田晶則(建築家/浜田晶則建築設計事務所)
- 12月21日(月)高山明(演出家/Port B)

\* 毎回19時スタート。場所は、駿河台キャンパス5号館5階スライド室1。参加費は、桜門建築会会員・日本大学学生は無料、それ以外は1,000円(当日に入会すれば無料)。会場ではキャッシュオンにてドリンクを販売します。

vol.21 / 2015.06.24 WED.  
ゲスト：北川貴好(アーティスト)

多方面からの視点を忘れないアーティストの本質 | 原田千穂(4年)



**建** 築と美術について考えさせられる回でした。ゲストの北川さんは、美術大学で建築を学び、アーティストとして活躍している方でした。美術的なアプローチから感じる建築とは、デッサンやスケッチを通すことで光の存在感、移り変わりを、より強く印象に焼き付けるものなのだと感じました。

大量の穴が一直線に抜ける空間であったり、光に集まる虫こそが主役であるといった作品は、やはり理屈から考えるものではなく、感じたことをいかに自分なりに形にしてアウトプットするかということなのだと思います。印象の強弱は個人の感覚差があるので、どういう点にどう目をつけ、どう表現に持っていくかという過程がとても興味深かったです。

また、黄金町のお話がありました。不埒な文化から生まれた空間が連続した場所ですが、その場の意味や歴史だけでなく、情緒や、そこにいた人、そこを訪れた人がどう感じるかということまですべて肯定的に捉え、空間をつくっているように感じました。その多方面からの視点を決して忘れることなく、自分の世界をつくり出していくアーティストの本質に、わたしはとても惹かれ、羨ましく感じました。 ■

vol.22 / 2015.07.22 WED.  
ゲスト：吉里裕也(東京R不動産/SPEAC inc.)

次世代の建築のあり方を考えさせられた | 橋本和弘(M1)



**今** 回の講義は、僕にとって大きな羅針盤になるだろう。それは、最近の僕が、将来の建築への携わり方を悩んでいたからである。そこに、大きなヒントを与えてもらった気がした。

僕は、最近、今までのように建築をつくること(トラディショナルな建築の更新)ができなくなってきていると実感することが多かった。しかし、それは同時に建築のあり方が変化してきていて、その捉え方を思考し、実走させる分野を持っていれば、建築やその周辺の都市を変化させる力を持っていると感じていた。

そのような中で、東京R不動産の吉里さんの話が、実際に行っている事例を中心に、今後の建築や不動産、マテリアルなど、まさに今行われている実走中の講義であったので、改めて建築の幅の広さを感じると同時に、建築の将来性を考えさせられた。その中で最も印象的であったのは、「建築だけでは街は変えられない」「人とのつながりで街は変わっていく」という言葉である。それは、「建築の力」を語らずに、新しい建築の可能性を示すものであったと僕は感じている。

そして、これからの建築を思考するとき、建物を設計するだけでなく、「新しい分野」や「人」「街」などの様々な因子を内包し、その因子も設計できるものでなければいけないということを大切にしようと思った。そして、これまでの建築の専門家が考慮できない「もの」を扱い設計することが、僕たちの世代には必要になってくるのではないか。そういう未来をつくることのできる唯一の仕事が建築家であるところり思いました。僕の羅針盤となり、次世代の建築のあり方を考えさせられた講演でした。 ■



# News & Topics

## 1 | 「第2回ラ・アトレ学生実施コンペ2015」において 建築学専攻1年生の小川ルビさん、小関真子さんがゴールド賞を受賞、 他5名がブロンズ賞を受賞

「第2回ラ・アトレ学生実施コンペ2015」（主催：株式会社ラ・アトレ）において、建築学専攻1年生の小川ルビさん（佐藤光彦研）、小関真子さん（今村研）による作品「窓に暮らす」がゴールド賞（最優秀賞）を受賞した。これは、「すむ+かたち」をテーマに、東京都世田谷区にある賃貸マンションの1室の改修に対する提案が募集されたもので、ゴールド賞に選ばれた作品の応募者は、改修プロジェクトチームの一員として実施デザインを担当する。

他に、建築学専攻1年生の西島修吾さん、敦賀谷俊さん、村田皓平さん、建築学科4年生の小林拓生さん、小山恭史さん（以上、佐藤光彦研）による作品「嬉々として住まう二枚の板が織りなす豊かな空間」がブロンズ賞と原田賞（審査委員長である原田真宏氏による賞）とアトレ賞（審査員である脇田社長による賞）を受賞した。1次審査通過作品8点のプレゼンテーションが行われて各賞が決定され、ブロンズ賞はシルバー賞1点に次ぐ賞として6点が選ばれた。



小川ルビさん、小関真子さんによる作品「窓に暮らす」



西島修吾さん、敦賀谷俊さん、村田皓平さん、小林拓生さん、小山恭史さんによる作品「嬉々として住まう二枚の板が織りなす豊かな空間」

## 2 | 「第2回POLUS学生・建築デザインコンペティション」において 建築学科4年生の洞口由宇さんが入選。建築学科3年生の2名が佳作を受賞

「第2回POLUS学生・建築デザインコンペティション」（主催：ポラス株式会社）において、建築学科4年の洞口由宇さん（佐藤光彦研）による作品「NEXT ROOF GARDEN」が入選（3等）、建築学科3年の赤城侑真さんと望月美那さんによる作品「ある時のアポトシス」が佳作を受賞した。テーマは「時のかさなり」。応募総数448点から選ばれたもので、入選は最優秀賞、優秀賞に次ぐ賞として3点が選ばれた。また、佳作は優秀・入選作品5点に次ぐ6組が選ばれた。



洞口由宇さんによる「NEXT ROOF GARDEN」

## News & Topics

### 3 | 古澤大助教が

#### 「JCD インターナショナルデザインアワード 2015 金賞」を受賞

「JCD インターナショナルデザインアワード 2015」(主催：一般社団法人日本商環境デザイン協会)において、古澤大助教(羽山真人氏(株式会社リライトデベロップメント)と共同)による建築作品「中央線高架下プロジェクト コミュニティステーション東小金井/モビリティステーション東小金井」が金賞を受賞した。本賞は商環境を中心とする空間デザインの顕彰を目的に、1974年から公募形式ではじめられたものであり、2003年からは公募対象がアジア地域まで広がられている。2015年は、国内421点、海外91点の計512点の応募があり、金賞は大賞(該当作品なし)、準大賞3点に次ぐ賞として4点が選ばれた。

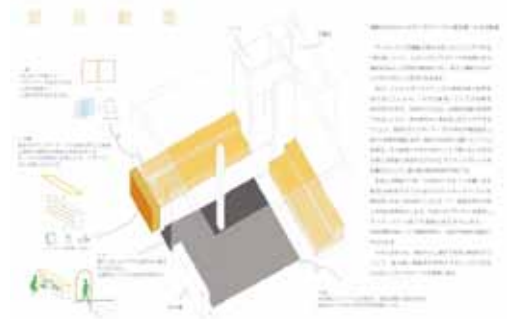


「中央線高架下プロジェクト コミュニティステーション東小金井/モビリティステーション東小金井」(2014)

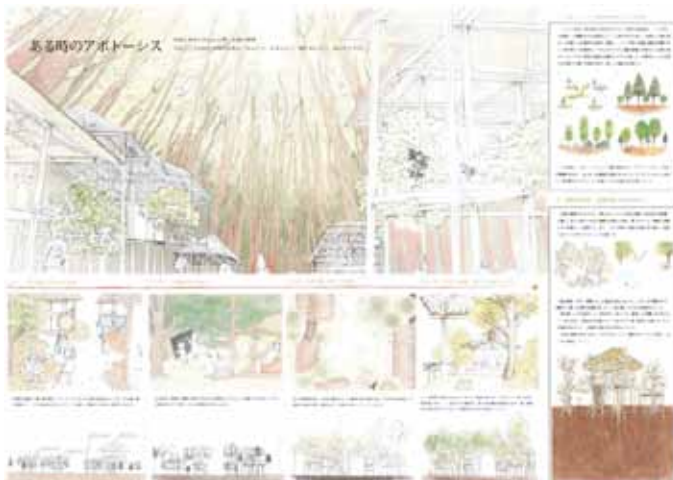
### 4 | 佐藤慎也研究室が

#### 「黄金町バザール 2015 空間デザイン公募」において次点に選出

「黄金町バザール 2015 空間デザイン公募」(主催：黄金町エリアマネジメントセンター)において、佐藤慎也研究室による作品「黄金劇場」が次点に選出された。これは、横浜市黄金町で開催されるアートプロジェクト「黄金町バザール」において、まちに必要なとされる機能を加えるために5つの既存空間に対する提案が募集されたもの(全応募61点)。アーティスト・クリエイターのレジデンススペースへの提案(応募8点)に対し、最優秀者に次ぐ作品として選ばれた。



佐藤慎也研究室による「黄金劇場」



赤城侑真さんと望月美那さんによる「ある時のアポトーシス」

#### ■出版

・岡田章教授と宮里直也准教授が執筆した『くわしすぎる構造力学演習Ⅲ 不静定構造編』(彰国社)が刊行された。問題を解くことを通じて構造力学の楽しさを味わいながら自然と理論が身に付くことを目的としており、『M・N・Q編』、『図解法と変形編』に続く第3弾。本書は主に「不静定構造」が記述されている。





## 「きっかけを与えてくれた建築家たち」

**僕** が建築の道に進むきっかけとなったのは、グラフィックデザイナーになりたいと入学した日大芸術学部で基礎デザインの課程が終わりを迎える頃だった。

デザイン専攻は2年次にビジュアル、プロダクト、住空間という3つの専門分野に分かれるのだが、1年間の基礎デザイン課程で写真や映画などの講義を聴講したり、バウハウスの山脇巖先生の講義の影響もあって、もっと広く大きく考えたいという気持ちが高まり、結果的に僕はビジュアルデザインではなく、住空間デザインを専攻することにしたのである。

それが建築とは言わないまでも、グラフィックという平面から空間へとシフトした瞬間だったと思う。W.グロピウス(1883-1969)やT.ドゥースブルグ(1883-1931)、A.マイヤー(1881-1929)、P.モンドリアン(1872-1944)、モホリナギ(1895-1946)、O.シュレンマー(1888-1943)など、僕にとってはバウハウスの芸術家たちの教えを知ることになった先生の講義は、デザインの広がりが無敵であると教えられた気がしてとてもワクワクしたことを思い出す。



バウハウス・デッサウ校舎 (photo=MCAD Library)

専攻が住空間デザインになると、実際に活躍されている建築家が授業を担当するようになった。当時は仙田満(1941-)、内藤恒方(1934-)、黒川雅之(1937-)、添田浩(1942-)、といった非常に個性的で魅力的な建築家が講師として招かれており、彼らのレクチャーやエスキスを受けながら、徐々に各人各様のさまざまな建築の世界に惹かれていった。そし

杉千春(すぎ・ちはる)

: 1981年日本大学芸術学部美術学科卒業。1981-1996年スタジオ建築計画。1988年同社取締役。1996年ブラネットワークス共同設立。1998-2004年、2005-09年日本大学理工学部建築学科非常勤講師。2004年から現在、関東学院大学工学部建築学科非常勤講師。



「生闘学舎」(1980)

て彼らの影響もあって、はっきりと建築に進むことを意識し出したのもこの頃である。中でも強く影響を受けたのは添田浩と当時、特別講義に現れた高須賀晋(1933-)という2人の建築家だった。

添田さんは当時35~36歳だったろうか。1969年に雑誌『都市住宅』に「自邸」を発表して高い評価を受けていた新進気鋭の建築家だった。当時は珍しい小豆色のSAAB(サブ)を乗り回し、僕たち学生をホームパーティにも招いてくれるなど、非常に格好良い先生だった。吉村順三(1908-1997)の住宅の素晴らしさを知った頃の僕にとって、添田さんの「自邸」の素晴らしさと相まって、初めて魅力的な建築家像を見せてくれた人物のひとりだった。

一方、高須賀さんは添田さんよりも歳は上だった。若い頃に交通事故で右腕と左手の指

3本を失っていた、いわゆる身障者ながら、美しいパースを何ん自由なく描いてみせるすごい建築家であった。いつも作業衣を着用していたような記憶があるが、颯爽とした添田さんとは対局的雰囲気を感じていた。当時は三宅島に通い、「生闘学舎」(1980)という活動家の更正のための施設を建設している最中であった。この建物は線路の枕木を再利用した建物で、合掌造りの大屋根を受ける耐力壁と妻側の壁は枕木を積み上げた校倉造りのようなつくりである。力強くシンプルな構成は見る者を圧倒する迫力を備えていた。設計者は高須賀晋、施工は大工の棟梁の教えを受けながら施主たちによる自主施工という難しい取り組みであったが、僕が卒業した年に無事完成させている。何か建築家のモノづくりへの執念のような凄みを感じさせてくれた人物である。

# Contents

## 02 [SPECIAL FEATURE]

### 日本建築学会賞各賞2015

#### 受賞者 卒業生・非常勤講師インタビュー

福島加津也＋富永祥子／福島加津也＋富永祥子建築設計事務所、多田脩二／多田脩二構造設計事務所

今村 水紀＋篠原 勲／miCo.

小西泰孝／小西泰孝建築構造設計

## 16 [REPORT]

理工系短大の65年の実績とあゆみ

短大建築・生活デザイン学科・夏季集中授業・2015年度サマーセッションレポート

夏季集中授業・2015年度デザインワークショップ

オウケンカフェ

## 20 [NEWS & TOPICS]

・「第2回ラ・アトレ学生実施コンペ2015」において

建築学科専攻1年生の小川ルビさん、小関眞子さんがゴールド賞を受賞、他5名がブロンズ賞を受賞

・「第2回POLUS学生・建築デザインコンペティション」において

建築学科4年生の洞口由宇さんが入選。建築学科3年生の2名が佳作を受賞

・古澤大輔助教が「JCD国際デザインアワード2015金賞」を受賞

・佐藤慎也研究室が「黄金町バザール2015空間デザイン公募」において次点に選出

## 22 [Architecture & Me]

vol.81 きっかけを与えてくれた建築家たち(杉千春)

## 24 [EVENT REVIEW]

mosakiのイベント巡礼vol.14

「オスカー・ニーマイヤー展 ブラジルの世界遺産をつくった男」

# SHUNKEN

2015 Oct. Vol.43 No.3

「駿建」

発行日：2015年10月10日

発行人：中田善久

編集委員：宇於崎勝也・佐藤慎也・井口雅登・長岡篤・古澤大輔・宮田敦典・山崎誠子・廣石秀造

編集・アートディレクション：大西正紀＋田中元子/mosaki

発行：東京都千代田区神田駿河台1-8-14 日本大学理工学部建築学科教室

TEL：03(3259)0724

URL：<http://www.arch.cst.nihon-u.ac.jp>

※ご意見、ご感想は右記メールアドレスまで<[shunken@arch.cst.nihon-u.ac.jp](mailto:shunken@arch.cst.nihon-u.ac.jp)>



## event review

mosakiのイベント巡礼 vol.14

## オスカー・ニーマイヤー展 ブラジルの世界遺産をつくった男

会場：東京都現代美術館  
2015年7月18日(土)～10月12日(月・祝)

## オスカー・ニーマイヤー日本初の大回顧展

♥ オスカー・ニーマイヤー、大好き！ みんなも大好きだと思うんだけど、なぜ今個展？って気はするよね。亡くなったばかり、というわけでもないし。

◆ 資料によると“2016年のリオデジャネイロでのオリンピック開催を前に、日伯外交樹立120周年を記念して”とある。この辺は大人の事情として、それより、プレカンファレンスではキュレーターの長谷川祐子さんが、現代の日本だからこそ、市民のための建築として、ブラジルの人たちに愛されているニーマイヤーを紹介したい、と熱く語っていたのが印象的だった。その辺が伝わるものになっているかもしれない。

♥ 素晴らしい。展覧会タイトルの副題は「ブラジルの世界遺産をつくった男」だもんね。人となりにも迫るものかもしれない。

◆ ただでさえフォルムが最高に魅力的な建築家だからね。カタチの美しさだけでも、相当魅せられるはず。

♥ さらに会場構成が、世界をときめくSANAAとき

た。これ、間違いないよ！ 早く展示、見ようよ！！

◆ どれどれ……あれっ？

♥ なんだか……さみしいね……？

◆ 展示室の壁には写真やキャプションが、ごく標準的な大きさでプリントしてあって、真ん中には模型が置いてあって。写真は最高にきれいだし、模型だって丁寧に、精巧につくられているし、展示されているモノそのものが、貧相でも粗末なわけでもないのに……何だ？ このさみしさ。

♥ 次の展示室では1/10模型がドーンと置いてあるけど、どの模型見ても、何を伝えたいのか全然わからない。

◆ 映像の展示室もあるけど、長いだよな……。1時間もの大作、観きつたひといるのかなあ。

♥ 吹き抜け空間の展示は、敷地周辺の写真をプリントしたカーペットが敷かれていて、靴を脱いで歩き回るといふもの。そこに1/30の模型が置いてあるんだけど、これがまた、迫ってくる臨場感というわけでもなく、俯瞰する爽快感もなく、なんていう

が、半端な縮尺なんだな。

◆ このカーペットの展示がクライマックスか。結局、アッサリ見終わっちゃったね。

♥ ニーマイヤーにアッサリとか、あり得ないでしょ。

◆ カタチの迫力も理念的なメッセージも人となりも、よくわかんなかったね。

♥ 展覧会っていうひとつのメディアで、ニーマイヤーを伝えるぞっていう気骨が全く感じられないんだよね。丁寧に実直な模型をつくりました、必要な写真を揃えました。って、それだけじゃメッセージにならないんだよ。それがさみしいんだよね。

◆ 展覧会全体も、模型ひとつひとつも、間が空いていて、漂白されたように白くて……ってありがちな感じだけど、その手で何でも対応できるわけじゃない。今回は対象がニーマイヤーにだけ、その問題が一層、浮き彫りにされる結果だったね。

## Recommend | 2015年10月 - 12月

【1】「ここに棲むー地域社会へのまなざし展」| アーツ前橋 |

会期：2015年10月9日(金)～2016年1月12日(火)

誰もがあたりまえのように実践している「地域に棲まうこと」を掘り下げて私たちの未来を考えていく展覧会。地域を見つめる今ここにある問題や環境に目を向ける14組の建築家やアーティストの実践から、私たちのこれからの棲まいを考える。参加作家に、アトリエ・ワン、乾久美子、Eureka、ツバメアーキテクト、藤本壮介、水谷俊博、ライゾマティクス リサーチほか。

【2】「建築家 フランク・ゲーリー展 “I Have an Idea”」| 21\_21 DESIGN SIGHT |

会期：2015年10月16日(金)～2016年2月7日(日)

半世紀以上にわたり建築の慣習を覆し、世間の常識に挑戦する作品をつくり続けてきたアメリカを代表する建築家フランク・ゲーリーの展覧会。「建築」「人」「技術」の3つの視点から、ゲーリーの「アイデア」に焦点をあて、アイデアが生まれる背景や完成までのプロセスを、数々の模型をもとに紹介する。会場には、プロジェクション・マッピングをはじめ、建築家の素顔に触れられる「ゲーリーの部屋」が登場。自由に発想することの楽しさと挑戦し続ける勇気を感じ取りに行こう。

【3】「ラーニング・アーキテクチャー 2015 | 建築、学びの冒険—大学の建築設計課題の動向展」|

東京ミッドタウン内デザイン・ハブ

会期：2015年11月20日(金)～12月26日(土)

建築教育の動向と潮流を、「建築設計課題」にスポットを当て、関東圏を中心とした建築系大学での建築設計課題の事例から、「課題とその意図」「設計の進め方と指導」「学生のエスキス」「最終成果物(模型・図面・グラフィック)」を一堂に集める。設計課題ひとつ取っても大学ごとに特色があるもの。こうして一堂に会することは滅多にないので、自分の興味を確かめるためにも、ぜひ足を運んでみよう。

## [ 編集後記 ]

今回の特集では、日本建築学会賞の各賞を受賞された卒業生や非常勤講師の方々を訪ねインタビューを行いました。また、いくつかのインタビューでは、実際に受賞した建築物を訪ね、その場で話をうかがいました。皆さんは、建物について、その存在を雑誌やウェブ上のメディアを通して、知ることが多いと思いますが、こうしてある建物に対して、実際に設計を行った建築家やそれを支えた構造家たちのリアルな話を重ね合わせてみると、建物の見え方が一層、深さを増して、楽しくなっていくと思います。夏休みや冬休みになると、友達が国内外の建物を見に旅に出ている様子を、SNSなどを通して目にするが増えたり、また東京であれば歩いていだけで、有名な建築物にふと出会うこともあるでしょう。そんなときは、あとからでもいいので、いろんなメディアを通して、その建物を建てることに関わった人たちのリアルな言葉に、必ず触れてみてください。そこにはあなたの感覚にフックする楽しい世界が眠っているはずですよ。(大西正紀+田中元子/mosaki)

「駿建」では、在学生、教員、非常勤講師の皆さまからの、コンペやコンクール、学会、スポーツ大会、その他の受賞・表彰に関する情報提供を下記メールアドレスにて受け付けています。<shunken@arch.cst.nihon-u.ac.jp>